

## 研究ノート

## 最後のナポリ王妃、マリア・ソフィア

カパッソ・カロリーナ

L'ultima regina di Napoli

Capasso Carolina

Maria Sofia di Baviera è stata l'ultima regina del Regno delle Due Sicilie, il regno fondato da Carlo III nel 1734 ed il più grande e florido degli stati italiani prima dell'unità. Regina a soli 18 anni, si è trovata a vivere il periodo più burrascoso della monarchia e della storia politica italiana, che porterà, come si sa, alla fine della dinastia borbonica nel 1861.

Nipote del re Massimiliano di Baviera e sorella minore della più famosa imperatrice Sissi, oltre all'innato portamento regale, aveva temperamento, idee chiare e coraggio da vendere. Nel breve anno di regno, si impone all'attenzione internazionale tanto per la sua bellezza, quanto per l'eroismo dimostrato nell'assedio di Gaeta, dove non esitò a sostituirsi ai soldati feriti pur di continuare il fuoco contro gli assediati piemontesi. Maria Sofia, infatti, tentò di riconquistare sino all'ultimo della sua vita, quella patria meridionale che lei, tedesca di nascita, aveva fatto sua e profondamente amata.

## 序

バイエルンのマリア・ソフィアは、一七三四年にカルロ三世<sup>1)</sup>が築き、統一以前のイタリアにおいて最も偉大で豊かな国家、両シチリア王国最後の王妃であった。わずか一年足らずの短い期間ではあったが、彼女は王国とイタリア政治の最大の激動の時代を王妃として生き、そしてブルボン王家の終焉に立ち会ったのだ。

王妃にして兵士であった英雄的な女性、ガエータの要塞の中、自ら火器を手を取った。

と、マルセル・ブルーストが『捕らわれの女』<sup>2)</sup>の中で讃えているように、マリア・ソフィアは、ガエータの要塞の中で、瀕死の重傷を負った砲兵に代わって、敵軍の包囲網に大砲を放つのにためらうこともなかった。最後の王妃は、その死の瞬間にいたるまで、両シチリア王国の復興を願っていた。彼女はドイツの生まれながら、ナポリを自らの国として深く愛したのだ。

## 1. バイエルン時代

マリア・ソフィア（マリー・ゾフィー）は、一八四一年十月四日、マクシミリアンとルドヴィカ・ヴィッテルスバッハの子として生まれた。八人兄弟の五番目であったマリア・ソフィアは、シュタルンベルク湖の岸辺に位置し、広大な公園の中にたたずむポッセンフォーヘン城とミュンヘンの宮殿の間で幼少期と思春期を過ごした。特にマリア・ソフィアが愛したのは、自然や動物（馬、犬、鸚鵡）、そして、バイエルンの山々を逍遥することであった。父の愛情を受けて「シュパッツ（小雀）」と呼ばれ、「背が高く、ほっそりして、紺色の美しい目と、目をみはるような栗色の髪をしていた。その立ち振る舞いは高貴にして、きわめて優雅であった」<sup>3)</sup>。

### 1-1. フランチェスコとの結婚に向けて

マリア・ソフィアが十七歳になり結婚適齢期を迎えると、母ルドヴィカは、ミュンヘンの宮廷の手を借りて、ヨーロッパ全土の王侯の中から最上の縁組を探し始めた。ミュンヘンからの返事はすぐに届いた。地中海に面した太陽の国、両シチリア王国の若き王子が、結婚に乗り気であるという。マリア・ソフィアは、いまだ相手の顔も知らないうちから、王妃の冠を頭に抱く自分を想像しては、子供のようにはしゃいだ。

結婚をめぐる交渉は、フェルディナンド二世<sup>4)</sup>の大使であったカルロ・ルドルフと、マリア・ソフィアの叔父であるバイエルン王<sup>5)</sup>によって進められた。

バイエルンの宮廷では、フランチェスコ王子の極端な宗教心を心配する声があった。フランチェスコは、亡き母マリア・クリスティーナ・ディ・サヴォイア<sup>6)</sup>に、信仰にも近い敬意を抱いていた。彼女はその禁欲的な生活と祈祷を愛する気質のために、ナポリ人から「聖女」と呼ばれ、騒々しくお祭り好きなブルボン宮廷とはかけ離れた人であった。マリア・クリスティーナは、出産直後二十四歳でこの世を去り、生まれた子は母の愛に飢えながら生涯を送ることになる。こうした出生の経験が、フランチェスコの、内向的で、穏やかで、従順な性格に、深い爪痕を残し、王位継承者にふさわしい政治的な活動よりも、瞑想ともの思いに向けられた生活の方へと、彼を追い込んだのだ。

その結果としてフランチェスコは、王位継承者でありながらも政治から離れて育った。父フェルディナンド二世は、両シチリア王国がその四方の国境を、北は「聖なる水（教会領）」で、そして南は「塩辛い水（海岸とシチリア）」<sup>7)</sup>で守られているため、安泰であると、王子に教え込んだ。

一八五九年一月八日、二人の結婚は代理人によって挙行されました<sup>8)</sup>。

その後、マリア・ソフィアはナポリに旅立つ前に、典礼にしたがって皇帝に拝謁するために、ウィーンを訪れている。ウィーンでは、姉である皇妃エリザベート<sup>9)</sup>の愛情のこもった歓迎を受けた。数日後には、フェルディナンド二世がトリエステに寄港させていた二隻の船のうち、フルミナンテ号に乗船しなければならず、船は、結婚式が執り行われるプーリアの都市マンフ

レドニアに出発することになっていた<sup>10)</sup>。旅程は、フェルディナンド二世の突然の病気のために延期され、下船もマンフレドニアからバーリに変更された。出発の延期に姉妹が悲しむことはなく、オペラ鑑賞や社交界のパーティに足を運んで優雅なひと時をともに過ごした。それから二月一日の午後、トリエステの総督の屋敷の中で、国境超えの象徴的な儀式が行われ、花嫁はイタリアの地を踏んだ。その後、船のデッキで、「シシィ」と「シュパッツ」の姉妹は感極まって抱き合い、声を上げて泣いた。それからエリザベートは下船して、船は出発した。

## 1-2. ナポリ王家の出迎え

ミュンヘンで代理婚が行われたまさにその日、ナポリの王族はカゼルタの王宮を後にして、マンフレドニアへと向かった。「その少し前から、王は体の不調をうったえていた。白髪が増え、太ってしまって、以前のように敏捷に馬にまたがることもかなわず、そして長く乗馬していることもできずに、すぐに疲れを口にするようになっていた」<sup>11)</sup>。宮廷の侍医ピエトロ・ラマーリアは、出発を春まで延期するよう助言したが、フェルディナンド二世は聞く耳を持たず、予定通りの出発を言い張った。

天候不順（吹雪や山崩れのために、国王たちはしばしば馬車を下りることを余儀なくされた）や、徐々に悪化していったフェルディナンドの健康のために、旅程は予定していたよりも大幅に遅れた。血液の感染から敗血症が起こり、フェルディナンドの体には膿瘍がいたるところに出来て、ひどい痛みを引き起こした。バーリに到着した一行は、総督の屋敷に滞在したが、国王の体調は悪化する一方で、ナポリへの帰路は船になった。

## 2. ナポリ王妃マリア・ソフィア

### 2-1. ナポリへの道

二月三日の午前十一時、花嫁を乗せたフリゲート艦フルミナンテ号は、バーリに入港した。マリア・ソフィアはデッキの上から、不安な様子で祝祭に湧く町を見下ろし、その人の群れの中に、自分の夫を見分けようとした。「ボートの上に、軽騎兵の美しい軍服に身を包んだ彼を見つけると、彼女は好意的な印象を抱き、彼を前にした時に、さりげない様子で彼に手を差し出すと、「ボンジュール、フランソワ」と挨拶した。マリア・ソフィアは、深紅のビロードの輝くようなドレスを着て、その上に黒貂の毛皮を軽く羽織っていた。トルコブルーの瞳、宝石、肩を覆うほどの長い黒髪、誇り高く優雅なその身のこなし、少女はフランチェスコの目に、美の輝きそのもののよう映った。あまりに魅力的な花嫁を目にして、生来が内気であった王子は、さらに臆病になり、「ボンジュール、マリー」と口にして、彼女の額に控えめなキスをするのがやっとであった」<sup>12)</sup>。宮殿に到着すると、マリア・ソフィアはすぐに、病床のフェルディナンド二世を見舞い、感激のあまり涙を流しながら、国王を抱きしめた。午後遅く、マリア・ソフィアは結婚式のための身繕いをし、その日のためにフェルディナンド二世がナポリから

持ってこさせた、王室で最も豪華な宝飾で身を飾った。バーリ大司教が結婚の祝福を行い、教皇ピウス九世の祝福の言葉も代読した。港に停泊していた船は祝砲を響かせ、楽隊はパイジエッロ作曲の国家を演奏した。

祝宴も終わり、列席者が饗宴の場を去ると、就寝の時間となった。フランチェスコ王子は、それが自分の手には余ることを知っていた。彼は性教育というものを受けたことがなかったのだ。厳粛な宮廷で神学生のように育てられたフランチェスコは、二十三歳にして、子供のように未熟であった。その夜ばかりか、続く数日間、花嫁はむなしく待ち続けた。フランチェスコは、マリア・ソフィアが眠った後で夫婦の間に入り、そして朝は、彼女が目覚める前にその場を後にした。初夜に続く数夜の苦い経験によって、マリア・ソフィアは孤独で、「泣き出したような衝動と、それに代わる気晴らしをしたいという欲求」<sup>13)</sup>を感じた。フランチェスコがほぼ一日中、父の病床を見舞っていたため、彼女の遊戯の相手はフランチェスコの弟たちであった。

フェルディナンド王の病状は改善の兆しがなく、さらに、首都ナポリを長く不在にしていたため、政務上の問題も出ていた。そこでナポリに戻ることに決め、三月七日、担架に乗せられた国王は、王妃マリア・テレーザ、フランチェスコ、マリア・ソフィアと宮廷人に付き添われて、フリゲート艦フルミナンテ号に乗り、バーリを出港した<sup>14)</sup>。ようやく憂鬱なバーリ総督府を後にしたマリア・ソフィアの前には、新しい世界が待っていた。当然ながら年若い公爵夫人には、自らの未来に待ち受けているのがどれほど複雑な運命であるか、想像することもできなかったであろう。一行は、ナポリから特別列車でカゼルタ<sup>15)</sup>に向かった。マリア・ソフィアは、壮麗なカゼルタの王宮と、一二〇ヘクタールもの広大な庭園に魅了された。彼女の脳裡には、故郷のポッセンフォーヘン城で自由気ままに過ごした日々がよみがえったことであろう。だが、カゼルタはそれ以外にも、イタリア南部の薫りと、熱気と、輝くような光に満ち溢れ、彼女は快楽的な熱に酔いしれた。

その頃、第二次独立戦争が始まっている。それは、ハプスブルク帝国に対するサヴォイア王家の戦争であり、広大なポー川平原へと領土を拡張する戦争であり、アルプス山脈と海に閉ざされた小さなピエモンテが発展し経済を振興するには不可欠な戦いであった<sup>16)</sup>。

フェルディナンド二世は、悪化する一方の深刻な病を抱えながらも、戦争の趨勢を気かけ、サヴォイア家にあからさまな敵意を見せ、フランチェスコ王子には、教会との同盟を堅持し、実母の実家であるサヴォイア家の「慇懃無礼なピエモンテ人」には気を許すなど論じた。それは予言のような訓告であった。一八五九年五月二十二日、フェルディナンド二世は四十九歳でこの世を去った<sup>17)</sup>。ガリバルディ襲来の一昨年、フランチェスコ二世は二十三歳でナポリの王座に就き、マリア・ソフィアは十八歳にして王妃となった。

## 2-2. 若き王妃

マリア・ソフィアはすぐに、両シチリア王国の政治が、宮廷とオーストリア派の支持をほし  
いままにしていた王太后マリア・テレザ<sup>18)</sup>の掌中に握られていることに気づいた。けれど  
もマリア・ソフィア王妃は、本来自らのものであるはずの権力を取り戻し、そして、継母の悪  
影響から夫を解放しようと心に決めていた。

ナポリ王宮内にフェルディナンド二世の亡骸を陳列しなければならなかったため、カポディ  
モンテ王宮に落ち着いた<sup>19)</sup>。

マリア・ソフィアひとりだけが、生命力を取り戻しはじめた。衣装を新調し、下着や部屋着  
を選び、髪形を変えては気を紛らわせた。日に四度も衣装を変えることがあったため、義母が  
驚き眉をひそめた。以前には隠れて煙草を吸っていたが、今では家族の前で、公然と煙草を味  
わった。マリア・テレザは、動物を嫌悪していたが、マリア・ソフィアはカナリアや、犬や、  
鸚鵡で、王宮を埋め尽くした。馬場で何時間も過ごし、フェンシングの練習を再開し、長時間  
の騎馬を楽しんだ。マリア・ソフィアは写真にも興味を持ったが、後に写真は、彼女に数多く  
の不愉快な事件をもたらすことになる。

王に即位してからの数ヶ月で、フランチェスコとマリア・ソフィアの関係は、目に見えて変  
わっていった。今ではともに寝起きし、ほぼ毎日、馬車で一緒に出掛けるようになった。国王  
となったフランチェスコは、前よりも堂々として、自然で、そして王妃に愛情を注ぐようになっ  
た。寂しげな様子は見られなくなり、無邪気な奇行が始まった。例えば、夏になると、マリア・  
ソフィアは海水浴がしたいと言い出した。当時、海水浴は庶民の習慣であり、前代未聞の話で  
あった。ところが王妃は、フランチェスコ二世の許可を得る。こうして王妃の「飛び込み」を  
眺めるのは、ナポリ人の娯楽のひとつとなった。彼女の写真は、最も美しく洗練された女性と  
してヨーロッパ中の新聞を飾り、姉であるオーストリア皇妃エリザベートさえも、そんなマリ  
ア・ソフィアの陰に隠れた<sup>20)</sup>。

だが、マリア・ソフィアは、反抗的で、気まぐれで、不真面目な少女ではなかった。彼女は、  
太い神経と、明快な思考と、強い勇気をもつ女性であった。最初にそうした性質を見せたのは、  
スイス兵の叛乱<sup>21)</sup>の時であった。スイス兵は常にブルボン王家に忠実で規律に厳しい連隊で  
あったが、ピエモンテのスパイによって買収され、叛乱にいたった。恐怖は凄まじいものであ  
った。王母はパニックにとらわれて、子供たちを集めると逃亡の準備を始めた。フランチェスコ  
は亡き母の部屋に閉じこもって、祈祷に没頭した。そんな中、マリア・ソフィアだけが、勇気  
と強い気性を発揮した。テラスに姿を見せると、叛乱者をドイツ語で罵倒し、その後すぐに近  
衛兵の将校に、叛乱軍と交渉するよう命じた。若き女王の強靱な精神力と気高い振る舞いに、  
民心は安堵し、叛乱は終息した。この事件の結果、スイス軍はナポリを後にし、自由主義者  
をはじめとするブルボン王家の敵たちは喜び合った。その軍事的欠落を埋めるべく、マリア・  
ソフィアが率先して動き、彼女の叔父であるバイエルン国王マクシミリアン二世が遣わしたバイ

エルン兵からなる三大隊が作られた<sup>22)</sup>。

### 2-3. 政治の状況

ずいぶん前から国内には、つねに思想上明確に分かれていたわけではなかったが、二つの党派が存在していた。一方はオーストリア派で、軍部や貴族、高位聖職者たちに多かった。もう一方は、憲法の制定を視野に入れたりベラルな改革派で、開明的なブルジョワに多かった。マリア・ソフィア女王は、王国の救済のためには、イタリアおよびヨーロッパ全土に到来していた新しい時代にそぐわない古い官僚体制を刷新しなければならないと感じていたため、後者の方に与した。

マリア・ソフィアの巧みな説得によって、夫フランチェスコは、オーストリアびいきだった王太后の影響下から脱し、「失われた時代の男」<sup>23)</sup>と呼ばれたカルロ・フィランジェーリ公を宰相に任命した。

マリア・ソフィアは、宮廷に渦巻く様々な利害の対立に気づいた。さらに、フェルディナンド二世の早すぎた死によって、王座の周囲に結束して若い国王を支えようとするのではなく、王家への忠誠心という絆から解き放たれてしまったように思われた。宮廷人はみな好き放題に振る舞い、フランチェスコ二世には忠誠も恐れもまったく抱いていないかのようなだった。

フィランジェーリの新政権は、マリア・ソフィアの支持を受けて、政治犯への恩赦や「ブラックリスト」の廃棄を公表した<sup>24)</sup>。さらに、和睦のしるしとして、自由主義者たちの王国への帰還を承認した。だが残念ながらナポリに帰還してきたのは、古い陰謀家たちで、彼らは反ブルボン運動を再び始める。彼らは、廉直なモラルの人である新国王に、体制を整える時間を与えようとはせず、また王妃によって好意を集め始めていた王家に、再び忠誠心が戻ってくるのを阻止しようと動いた。

そうするうちに、事態は急変する。カヴールという有能な宰相に恵まれたピエモンテの王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世は、勢力を積極的に拡張していった<sup>25)</sup>。フランス軍の支援を受けてロンバルディを手に入れると、人民投票を巧みに操作しながら、トスカナ、エミリアばかりか、教皇領であったロマーニャまでも併合した。その間にもカヴールは、既に危うい状態にあった両シチリア王国の基盤を揺るがすことになる工作網を張り巡らしていた。ナポリでは国王が脆弱で、宮廷にも忠臣が少ないことを知っていたカヴールは、巨額の資金（四八〇万ドゥカーティと言われている）をナポリ銀行から貸し付け、両シチリア王国の将軍、提督、官僚を買収するために使用した。サルデーニャ王国に買収された者たちの中には、警察大臣リポリオ・ロマーノや、フランチェスコ王の叔父であり先王の弟であったシラクサ伯レオポルドもいた。サルデーニャ王国は、オーストリアを筆頭とした神聖同盟を恐れていたため、両シチリア王国内で、自発的に蜂起が起こったという風に事を運ぼうとしたのだ。そこでサルデーニャ王国は、さらにガリバルディを援助する。



ナポリの諜報機関は、ガリバルディがサルデーニャ王国の暗黙の同意を得て、リグリアで実行に移しつつあった準備を、フランチェスコ二世に警告した。ガリバルディ軍の数、日程、そして上陸予定がシチリアであったことまで究明していた。フランチェスコ二世は船団に警戒態勢を命じ、ガリバルディ軍を食い止める防衛隊の規模を取り決めた。少なくとも紙の上で考えれば、両シチリア国王が、迫りくる事態を悠然と眺めていたのも当然であった。

当時、ナポリ海軍は地中海最強の呼び声が高かった。大小合わせた船が三十六隻で、そのうち、フリゲート艦（現代の巡洋艦に等しい）が十一隻、八十四台の大砲を備えた船が二隻、十八台の大砲を備えたブリガンティーン艦が二隻。そして船団を率いていたのはアクイラ伯ルイージョ、国王の叔父であった。また陸軍も八万三千人と、イタリア半島で最も兵数が多く、そこにスイスやバイエルンの傭兵も加わった<sup>26)</sup>。

一八六〇年五月五日、この圧倒的な軍隊と戦うべく二隻の汽船ピエモンテ号とロンバルド号が、世界史上類のない混成軍を乗せてジェノヴァ近郊のクワルトを出港した<sup>27)</sup>。それはおよそ千八十人からなる民間人で、医師、弁護士、技師、元神父と、様々な職業の者たちであった。乏しい軍資金と貧しい武装を携えて、アクトンの言葉を借りれば「千一夜物語」<sup>28)</sup>ともいえるべき、ガリバルディの偉業が始まろうとしていたが、それは海賊行為以外の何ものでもなかった。ヴィットリオ・エマヌエーレ王の傘下にいたジェノヴァの為政者たちは、さりとてナポリと正面切って戦争をするだけの力もなかったが、ガリバルディたちの準備に手を貸した。

同様に、シチリアのパレルモやマルサーラに駐屯していたイギリス海軍の援護があったことも否定できない。イギリスは、サヴォイア家によるイタリア統一に好意的で、その後自らの同盟国としてフランスの脅威に抗し、シチリアの保護領と取引を広げることを狙っていたのだ<sup>29)</sup>。また、イギリス政府の反ブルボン政策は、シチリアの硫黄の権益や、フェルディナンド二世に対する個人的な嫌悪、グラッドストーンの憎悪に満ちた書簡<sup>30)</sup>、イギリス的な憲法主義の激しい布教から来ていたのだが、当時イギリスに亡命していたセッテンブリーニ<sup>31)</sup>や、カヴールにも影響を与えていたボエーリオ<sup>32)</sup>といったナポリの知識人たちを籠絡してしまった。強力な英国かぶれは、ジャコバン派の組織と接点を持つことで激化し、革命を希求するようになっていった。

ガリバルディのパレルモ征服の知らせがナポリにもたらされると、市内には騒乱が生じ、オーストリア派と自由主義者たちの間で衝突が勃発した。警察に放置された警察分署のいくつかは放火された。フランチェスコ二世はこうした状況を踏まえて戒厳令を布告し、リポリオ・ロマーノ<sup>33)</sup>を警察大臣に任命した。ロマーノは後に政府を裏切り、ガリバルディ側につくことになる。

ブルボン王国の破滅の原因は、当然ながら責任ある立場にいた者たちのせいでもあるだろうが、王国そのものの組織的な問題にも帰せられる。一つの王国には、一つの中央政府が必要であるにもかかわらず、両シチリア王国の場合、ナポリとパレルモにそれぞれ別の政府があったのだ。有能な指揮官が最高責任者として一人いなければならないところに、多数の指揮官がい

て、それがあまりに無能で、おまけに買収されていて、互いに対する猜疑心はひどいものだった。最初に海軍が、そして後には陸軍が、敵側に買収された。六十〇台の最新式の大砲を備えたフリゲート艦「ボルボーネ号」を含む、多数の軍艦がピエモンテ側にまわり（ボルボーネ号はガリバルディ号と名前を変えられた）、後にブルボン軍が立てこもったガエータの城砦の砲撃に使用されて、製造にあたって進水式まで行った船大工や海兵といういわば生みの親を攻撃することになる<sup>34)</sup>。

宮廷も二派に分裂していた。先王妃マリア・テレザとその子供たち、そして多くの高官や役人が首都ナポリを離れてガエータの要塞に避難し、認可されたばかりの憲法や改革、それを手掛けた国王フランチェスコ二世を批判した。国王のそばにとどまったのは、わずかながらも忠実な大臣たちと、不屈の王妃マリア・ソフィアであった。マリア・ソフィアはすぐに政府の手綱を取り、勇気と知性というその資質をここでも発揮した。

将校たちの幾人かは、あるいは無能で、あるいは敵側に寝返ったため、シチリアに続きカラブリアでも、ブルボン軍はガリバルディ軍に屈した。兵たちの怒りはすさまじく、戦うことなくパレルモを放棄し、そして敵の攻撃に敢然と立ち向かっていたレッジョの守備隊に援軍を送ろうとしなかった將軍の一人<sup>35)</sup>が、軍内で殺害された。將軍たちは続々とガリバルディに降伏していった。ブルボン軍が解体していく中、カラブリアの兵たちは土地を後にして、ナポリへと向かった。国王を護衛するためである。

港からナポリを攻撃すべく、ピエモンテの船で襲来した海軍歩兵および狙撃兵からなる三千人の兵士が上陸した<sup>36)</sup>。サレルノまでがガリバルディの手に落ちると、フランチェスコ二世は、愛する町が血の海で汚されることを恐れて、ナポリを離れる決断をした。九月六日、歩兵隊四万人、騎兵隊六千人、重砲二百台とともに首都ナポリを後にした<sup>37)</sup>。わずか数千人の志願兵で迫ってくるガリバルディ軍と戦うには、充分すぎるほどの装備であった。国王の狙いは、ガエータとカプアの間に兵力を集中し、ヴォルトゥルノ川とガリリャーノ川の間に防衛線を引くことにあった<sup>38)</sup>。ピエモンテ軍が、宣戦布告もなく教皇領の中立を一方的に破って進軍してくるなど、予想すらしていなかったのだ。

マリア・ソフィアは出発の前日、市街に出て最後の挨拶をした。それがナポリ民衆との最後の接触となる。彼女は所有していた豪華な衣服や宝飾品のほぼすべてをナポリに置いていった。国王が持ち出したのは、文書のつまった複数の箱、印璽、そして身の回りの品が数点で、金銀を散りばめた最高級の陶磁器などは王宮に残していった。フランチェスコ二世はナポリ銀行に、個人的な資産もすべて預けていった。千百万ドゥカーティおよび金貨五千万フランという莫大な金額は、ガリバルディに押収された後、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世の金庫に収められることになる。王子たちの資産や王女たちの持参金、ブルボン家の個人的な財産、ファルネーゼ家からの遺産、そしてフランチェスコ二世の母、サヴォイア家のマリア・クリスティーナの持参金の全てが押収された。王宮を飾ってきたカポディモンテの陶磁器、家具、銀製のベッド、



絨毯、絵画が数多く持ち出されて、トリノに運ばれ、サヴォイア家の王宮を彩ったことは言うまでもない<sup>39)</sup>。

### 3. 両シチリア王国の終焉

#### 3-1. ナポリを後にして

国王一行は、一八六〇年九月六日午後五時に王宮を後にした。国王は軍服、マリア・ソフィア王妃は旅行用の服装に、花を飾った麦わら帽子をかぶっていた。二人はフリゲート艦メッサツジェーロ号に乗って、ガエータ港に到着した。護衛艦はバルテーノペ号だけで、他の船は全て、様々な口実を設けてナポリ港に残った<sup>40)</sup>。

宮廷内の策謀から遠く離れ、絶対的な信頼を寄せてくれる忠臣に囲まれ、そして王妃の励ましを受けて、フランチェスコ二世はようやくにして心を落ち着け、生まれ変わったように見えた。

一八六〇年十月一日、ヴォルトゥルノの戦いが始まった<sup>41)</sup>。それは、この奇妙な一連の戦争の中で、唯一、本物の戦いであった。衝突は凄まじく、ガリバルディ軍は退却を余儀なくされた。ガリバルディ自身、攻撃を受けて落馬し、落命かあるいは捕虜になる危険に見舞われた。国王は自ら兵士の中に混じって、彼らを勢いづけた。臆病で知られた「フランチェスキエッロ」が、その時は最大の勇気を振り絞ったのだ。国王は敵陣に入り込み、ピエモンテ軍を混乱に陥れたが、カゼルタから到着した援軍の助けを受けて、敵軍も勢いを盛り返した。敵の援軍が迅速に到着したのは、汽車を利用したためであったが、皮肉なことにそれはブルボン家が敷設した鉄道であった。ナポリ兵士たちの夢は消えようとしていた。リトゥッチ准尉は退却の命令を出した。だが兵たちの中には復讐戦を願う者も多く、とりわけ若い将校たちは、翌日に再戦していれば、間違いなくガリバルディ軍を蹴散らしていただろうと、後日、公然と口にする者もいた。フランチェスコ二世も同じ考えであったが、作戦会議の席で、翌日の再戦は不可能だという將軍たちの意見に屈してしまった<sup>42)</sup>。

そうするうちにも、事態は進行していった。十月三日、敵軍を率いるヴィットリオ・エマヌエーレ二世は、教会の中立性を無視し、宣戦布告もなく教皇領を横断し、ナポリ軍の背後に軍を進めた。カヴールは、革命によって乱された南イタリアに秩序を回復する必要があると、武装を正当化した。だがこうした動きは、あやうくヨーロッパ規模の大戦争を引き起こす危険性をはらんでいた。スペインおよびフランスは、サルデーニャ王国との外交を断絶し、オーストリアはプロイセンおよびロシアと同盟を組んで、ミンチョ側に軍隊を進めた。嵐を収めようと考えたのはイギリスで、次のような電報を公表した。「イギリス政府は、イタリア人たちが、自らの利害に対する最良の裁判官だということを認める。(中略) またイギリス政府には、オーストリア、フランス、プロイセン、ロシアが、サルデーニャ国王の行動に対して見せた非難を支持する十分な理由が見当たらない」<sup>43)</sup>。

その結果、ヴィットリオ・エマヌエーレ二世を阻む者はなくなった。トロント川を越えて両シチリア王国領内に入ると、アブルッツォを抜けて、ナポリへと行軍していった。ナポリでは二日にガリバルディが人民投票を実施し、サヴォイア王家による両シチリア王国のサルデーニャ王国への併合が決定した<sup>44)</sup>。だが多くの者たちはそれが何を決め投票かさえ分からず、エリオット（英国の大使）によれば、知識人階級の多くは、独立国にとどまることを望んでいたという<sup>45)</sup>。十月二六日、ガリバルディはテアーノでヴィットリオ・エマヌエーレ二世に謁見し、彼を「イタリア国王」として認めた。こうして一つの王国は終わり、一二六年続いたブルボン王家の支配も終わった<sup>46)</sup>。

### 3-2. ガエータの攻防戦

こうして、ガエータの攻防戦が始まった。フランチェスコ二世とマリア・ソフィアは、ガエータ城内で最高の敬意と支持を受けた。伝統的にピエモンテ側の歴史家たちは、ガエータの攻防戦にわずかな行しか割かず、「フランチェスキエッロ」王の兵士たちを擁護し、マリア・ソフィアと哀れなナポリ兵たちの英雄的な行為を黙殺してきた。だが、この上なく勇敢に、長く悲惨な籠城戦を戦ったナポリ兵たちがガエータで見せたのは、軍人の名誉そのものであった<sup>47)</sup>。

それでも生活必需品には事欠き、蓄えもわずかであった。何百頭という馬やラバが、飼料不足のために、最初の数ヶ月で飢死した。ベッドやマットレスどころか、野営用の毛布もなかったために、兵士たちは地面の上にそのまま寝た。替えの軍服や下着もなかった。薬ばかりか、傷を覆う包帯も不足していたために、軍医たちは古いシャツやカーテンを裂いて包帯にあてた。ガエータのヒロインとなったマリア・ソフィアは当時まだ十九歳の少女であったが、敵軍の爆撃をものともせず、砲撃の煙が立ち上がる中、馬にまたがって駆け巡り、砲兵隊を励ました。昼となく夜となく、王妃は負傷者を見舞い、自分にあてられた食事を持ち出しては、彼らに与えた。彼女は看護師や修道女にまじって兵士たちの看護にあたり、その傷を洗ったり消毒したりした。黒いビロードのその服には、時おり虱が湧いたが、看護師たちが掃ってくれた<sup>48)</sup>。

マリア・ソフィアは包囲戦の生ける象徴となった。新聞は、偉大なる王妃という彼女のイメージをヨーロッパ中に伝え、少なからぬ貴族たちが、古い軍服に身を包んだうら若き女性に魅了されて、志願兵として駆け付けた。チフスやその冬の寒冷、食糧不足のために、ガエータ城の状況はさらに悲劇的なものとなったが、要塞を明け渡そうという夫の問いかけを彼女は撥ね付けた。

時が経つにしたがって、ヨーロッパの大国（オーストリア、スペイン、ロシア）による軍事支援というフランチェスコ二世の期待も消えていった。それはまた一方で、サルデーニャ王国の恐れるところでもあり、そうなる前に少しでも早く要塞を陥落しようと、敵軍は砲撃の手を強めた。一月十九日、ナポリ側への補給のためにとどまっていたフランス海軍が去ると、ガエータ湾はピエモンテ軍の前にむき出しにさらされた。

二月十三日、ピエモンテ軍は八千発の大砲で襲撃し、ガエータの要塞は完全に破壊され、都市の大部分も灰燼に帰した。一発が火薬庫を直撃し、十八トンもの火薬が爆発して、將軍二名と五〇人の兵士が命を落とした。その日の午後、フランチェスコ二世は降伏文書に署名をした。二月十四日の明け方、フランチェスコ二世とマリア・ソフィアはガエータを明け渡し、フランスが用意した船に乗った。軍楽隊がパイジエロ作曲のブルボン賛歌を奏でる中、ブルボン王家の旗が下ろされていった<sup>49)</sup>。

#### 4. ローマ時代

ローマでは、一八四九年の騒動を受けてローマを離れざるを得なくなった際に、ブルボン家が示してくれた歓待を感謝していたピウス九世が、クイリナーレ宮殿を住処として提供してくれた<sup>50)</sup>。王妃マリア・ソフィアは、戦争が公には終焉したが、侵入者ピエモンテ人たちとの闘争は継続中であることに気づいていた。軍隊を組織して、ゲリラを扇動し、世論を揺り動かし、ヨーロッパ各国を巻き込んだ外交活動を展開することが必要であった。叛乱は、旧両シチリア王国領内全土に広がり、さらに、マリア・ソフィアが仕掛けるレジスタンスに加わるべく、ヨーロッパ中から志願兵がローマに集まった<sup>51)</sup>。彼女の旺盛な活動に、自由主義者たちのグループは反感を表明し、一八六二年、彼女を中傷する卑劣なキャンペーンを起こして、裸体のマリア・ソフィアが猥褻なポーズをとったモンタージュ写真が、教皇に、国王に、そしてヨーロッパ中の宮廷に、ばら撒かれた。教皇庁警察は犯人を特定して逮捕した。それは、アントニオとコスタンツァのディオタッレーヴィ夫妻であったが、両者ともピエモンテに好意的な組織のメンバーで、同組織は、マリア・ソフィアの殺害計画も立てていた<sup>52)</sup>。

マリア・ソフィアはこの時期、教皇軍の将校であるベルギー人の伯爵アルマン・ド・ラワイスと知り合い、二人は深い関係になって、その結果マリア・ソフィアは双子の女兒を出産したと伝えられている。一八六二年六月、身重の王妃はボッセンホーフェンの両親のもとに赴き、その後アウクスブルクのウルスラ会の修道院で数ヶ月を過ごしている。マリア・ソフィアの姪、ラリッシュ伯爵夫人マリー・ルイーゼは、死後、ライプツィヒで出版された回想録の中で、マリア・ソフィアとド・ラワイスがもうけた双子のうちの一人は、兄ルートヴィヒとヘンリエッテ夫妻の養女とされ、もう一人のデイジーは父親に引き取られたものの、幼くしてチフスでこの世を去ったと伝えている。

一八六三年四月、マリア・ソフィアは家族に説得されて、フランチェスコのもとに戻っている。彼女は修道院から夫に手紙を書き、全てを告白しているが、なぜか生まれたのはデイジー一人だけだったと伝えている。フランチェスコは彼女を許し、ローマで待つと返事を寄越した。ほどなくして二人は、ブルボン家が所有していたファルネーゼ宮に移り住んでいる<sup>53)</sup>。

第三次独立戦争が起こると、ブルボン家の者たちは、イタリア王国が敗北して、全てが白紙に戻るのではないかと期待をしたが、彼らの期待はまたもや幻に終わった。一八六六年七月3

三日、オーストリアがケーニヒグレーツで敗北し、それに続いてヴェネトもイタリア王国に併合されると、ローマの王党派は凍り付いた。時が経つにつれて次第に、国際世論もブルボン王家の復興に対して、無関心になっていった。マリア・ソフィアは、疲労と不信にふさぎ込んで、実家のバイエルンに帰省したが、姉エリザベートに諭されて、すぐにローマにもどっている。

一八六九年春、ようやくにして嬉しい知らせがもたらされた。王妃は妊娠し、同年のクリスマスには女兒を出産し、マリア・クリスティーナ・ピアと名付けた。だが、夫婦の喜びは長く続かなかった。三月二十八日の夜、生後わずか三ヶ月の王女はこの世を去っている。

## 5. 亡命

### 5-1. パリ滞在

愛娘の死という悲劇の後、二人はすっかり変わってしまった。マリア・ソフィアは、王座の奪還のための効果がさっぱり見えない南イタリアのパルチザン活動にも幻滅し、ブルボン家復興のために仕えていたゲリラや冒険家とも関係を断ってしまった。彼女はウィーンに行き、姉のもとに滞在した。

フランチェスコはふさぎ込み、神秘的な宿命論にはまり込んだ。ローマの亡命政府を解散して、王の称号を放棄し、カストロ公爵というシンプルな称号を名乗った。バイエルンのシュタルンベルク湖畔の小さな城に隠棲した。

一八七〇年九月二〇日、カドルナ率いる兵士たちによってローマが征服され<sup>54)</sup>、地上における教会の権力が終わりを迎えた。

オーストリアとバイエルンを旅した後、フランチェスコとマリア・ソフィアは、パリのサンマンデに居を構え、親族やごく親しい友人だけを招待して暮らした。パリ時代の王妃は競馬に熱を上げて、レース観戦のために、ヨーロッパ中の都市を訪れている。世紀末には、多くの悲しい知らせが彼女をみまった。一八八〇年から一八九〇年にかけて、両親、甥であるバイエルン国王ルートヴィヒ二世（おそらくは自殺）、姉エリザベートの息子であるオーストリア皇太子ルドルフと若い愛人（彼らもおそらくは自殺であろうとされている）と、近親者が相次いでこの世を去ったのだ。一八九四年秋には、トレンティーノの温泉保養地アルコに、糖尿病の治療のため「ファビアーニ氏」の名で滞在していたフランチェスコが体調を崩し、一八九四年十二月三十一日、五十八歳で亡くなった<sup>55)</sup>。一八九七年には妹のゾフィー・シャルロッテが、パリで火災に巻き込まれて死に、そして翌年にはオーストリア皇妃である姉のエリザベートが、ジュネーヴの湖岸でイタリア人アナキストに刺されてこの世を去っている。未亡人にして生計手段もなかったマリア・ソフィアは、ヌイイ＝シュル＝セーヌに移り住み、競走馬の飼育を手掛けて成功した。

## 5-2. 最後の期待～結びにかえて

マリア・ソフィアは、悲しみに打ちひしがれながらも、運命を前に全てを諦めたわけではなかった。英雄的な匪賊の叛乱は終息したが、誕生したばかりのイタリア王国には、貧困と政府の抑圧に起因する社会不安が増大し<sup>56)</sup>、社会的な抗議活動が頻発し、それは、バーヴァ・ベッカリス将軍が民衆に向けて発砲を命令したミラノの五日間のように、しばしば血をもって制圧された。こうした世情にあって、ヌイイのマリア・ソフィアの期待が再燃したとしても、不思議ではなかった。

彼女はアナーキストたちに接近し、フランスのアナーキストの首領であった、暴力的な過激論者シャルル・マラートと強い友情で結ばれた。マリア・ソフィアとはマラートから、イタリアのアナーキストの首領であったエンリコ・マラテスタを紹介された<sup>57)</sup>。各国のアナーキストとの交流は盛んになり、彼女は「アナーキストの女王」と呼ばれたほどであった。女王の忠臣となった中には、かつて王党派の新聞の編集長を務めたことのあるナポリ人のアンジェロ・インソーニャがいて、イタリア王国に対する広告戦略を請け負った。そうした活動の中で、国王ウンベルト一世の暗殺計画が練られた。実行犯のガエターノ・ブレッシは危険なアナーキストで、そのためアメリカのパターソンに亡命して、その後ヨーロッパに戻った。フランスのルーヴルからイタリアに入り一九〇〇年七月二十九日にモンツァで国王を暗殺している。証拠は残されていないが、マリア・ソフィアが暗殺計画の着想を与えたのではないかと思わせる徴候は少なくない<sup>58)</sup>。

事件の後、イタリア政府は、マリア・ソフィアの住居で行われていた秘密の会合を恐れだし、諜報員の監視がつけられるようになった。だが、国王の暗殺は、望んでいた成果を挙げるにはいたらなかった。王国を危機に陥れ、民衆による革命を後押しするどころか、結果はその逆となったのだ。ブレッシは、その後も刑務所にいながらも、革命家たちと手紙を交わし合ったため、政府からすれば、目障りな囚人となった。こうした危険な書簡の一通が、ジョリッティ首相の手に渡った。邪魔な終身刑服役者ブレッシは、独房の中で、タオルで首を吊った姿で発見された。アナーキストのグループは痛い敗北を喫したのだ。

時が経つとともに、イタリア政府は、「バイエルンの牝鷲」<sup>59)</sup>の危険性を脅威とは感じなくなっていった。だがそれは誤解であった。両シチリア王国の消滅からおよそ五十〇年が経過し、マリア・ソフィアは既に七十〇歳を数えていたが、サヴォイア家に対する陰謀を企み、ヨーロッパの政治の変化に期待をかけることを諦めたわけではなかった。ウィーンの宮廷では、皇帝フラン・ヨーゼフ一世の甥にして皇太子であったフランツ・フェルディナント大公が、その反イタリア政策の視点から、ロンバルド＝ヴェネトを取り戻し、将来的にはイタリア半島の再編の一環として、両シチリア王国の再建を構想していた。

マリア・ソフィアはフランス退去を余儀なくされ、ミュンヘンに移住した。彼女はヴィッテルスバッハ家の屋敷の右棟を住処としたが、左棟はドイツ銀行に売却されていた。老従僕二名、



女中二名、そして秘書官が彼女に仕えた。

そうするうちに、フランツ・フェルディナントがサラエボで暗殺されて、第一次世界大戦が勃発する。一九一七年秋、カポレットでイタリア軍が大敗した時には、サヴォイア家の終焉へと向かう政変に繋がるのではないかと、マリア・ソフィアは期待した。ところが、大部分が南部出身者であったイタリア軍は、ピアヴェ側の戦闘でオーストリア軍の侵攻を止めた。ピアヴェ川の戦いの功労者アルマンド・ディアス将軍がナポリ人であったのは、運命の皮肉としかいいようがない。終戦間際の数ヶ月、マリア・ソフィアはイタリア人捕虜のもとに出向いて、看護にあたった<sup>60)</sup>。マリア・ソフィアはガエータの籠城戦を思い出さずにはいられなかったが、それは彼女の心を締め付けた。五六年が経っていたが、ナポリへの愛情は消えていなかった。

その後、彼女はヨーロッパの政治が大きく変動していくのを目にした。オーストリア・ハンガリー帝国は消滅し、イタリアではファシズムが嵐を呼び、ドイツでは、その後ヒトラーが政権を取るにいたる最初の徴候が見られた。それは彼女の世界の崩壊を意味していて、そしてマリア・ソフィアはそのことを分かっていた。

彼女は八十〇歳になっても、毎朝の乗馬という習慣を欠かさなかった。そして一九二五年一月十八日の夜、眠りながら息を引き取った。その数日前、ガエータの要塞にはためくブルボン家の旗を夢にみたと言われている。

## 注

- 1) カルロス 3 世 (1716 ~ 1788) はナポリ・シチリア王 (1735 ~ 1759)、のちブルボン朝のスペイン王 (1759 ~ 1788)。スペインのフェリペ五世とその 2 番目の妻パルマ公女エリザベッタ・ファルネーゼの間の長男で、フランスのルイ十四世の孫にあたる。
- 2) Proust 2012.
- 3) Tosti 1947: 10.
- 4) フェルディナンド二世 (Ferdinando II, 1810- 1859) は、両シチリア王。先王フランチェスコ 1 世とマリア・イザベッラ (スペイン王カルロス 4 世の娘) の息子。
- 5) マクシミリアン二世 (Maximilian II, 1811 - 1864) は、バイエルン王国の第 3 代国王 (在位: 1848 年 - 1864 年)。第 2 代国王ルートヴィヒ一世の長男。全名はマクシミリアン・ヨーゼフ。
- 6) マリア・クリスティーナ・ディ・サヴォイア (Maria Cristina di Savoia, 1812 - 1836) は、両シチリア王フェルディナンド二世の最初の王妃。サルデーニャ王ヴィットーリオ・エマヌエーレ一世と王妃マリーア・テレーザの六女 (第 7 子) として、カリアリで生まれた。1832 年 11 月 21 日、フェルディナンドと結婚した。1836 年 1 月 16 日に長男フランチェスコ (のちのフランチェスコ二世) を生むが、5 日後に急死した。
- 7) Petacco 2014: 46.

- 8) De Cesare 1969: 416.
- 9) エリーザベト・アマリエ・オイゲーニエ・フォン・ヴィッテルスバッハ ( Elisabeth Amalie Eugenie von Wittelsbach、1837 - 1898) は、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝フランツ・ヨーゼフ一世皇后
- 10) De Cesare 1969: 416
- 11) Ibidem: 417
- 12) Ibidem: 473.
- 13) Ibidem: 476.
- 14) Acton 1997: 438.
- 15) 宮殿の建設は、1752年にナポリ王カルロ三世（注1参照）の命令で、お抱え建築家ルイー・ヴァンヴィテッリ指揮の下に始められ、建設が終わったのは三男フェルディナンド四世（のちの両シチリア王フェルディナンド一世の代になってからだった）。
- 16) 北原 2008: 352-407
- 17) Calà-Ulloa 1967: 312
- 18) マリーア・テレーザ・イザベッラ・ダズブルゴ＝テシェン（1816 -1867）は、オーストリア皇帝家の分家であるテシェン公爵家の公女で、両シチリア王フェルディナンド二世の2番目の王妃。ドイツ語名はマリア・テレジア・イザベラ・フォン・エスターライヒ。
- 19) カポディモンテは補修工事が終わったばかりで、55の部屋を備えた壮麗さを誇ったが、国王を亡くした沈鬱が消え去ることはなかった。Campolieti 2009: 229.
- 20) Petacco 2014: 73.
- 21) Gleijeses 1978: 797.
- 22) Acton 1997: 452-463.
- 23) Galasso 2007: 753.
- 24) Ibidem: 755.
- 25) 北原 2008: 352-407。
- 26) Petacco 2014: 93.
- 27) ガロ 2001: 295-336. ; 北原 2008: 401.
- 28) Acton 1997: 491.
- 29) Ibidem: 493-497; Gleijeses:802.
- 30) Galasso 2007: 700; AA.VV. 2008: 115-128.
- 31) Belmonte 2015: 167-170.
- 32) Ibidem:171-176.
- 33) Perrone 2009.
- 34) Montalto 2007; Lamberto 1978.

- 35) AA.VV. 2001: 151.
- 36) De Lorenzo 2013: 128. ; Acton: 527.
- 37) De Lorenzo 2013: 129.
- 38) Coniglio 1999: 451.
- 39) Campolieti 2009: 300. ; Petacco 2014: 115. ; Acton 1997: 556.
- 40) De Cesare 1969: 922-935. ; Acton 1997: 553-564.
- 41) Galasso 2007: 769. ; Acton 1997: 566-568.
- 42) ガロ 2001: 330-331.
- 43) Acton 1997: 576.
- 44) ガロ 2001: 334-335.
- 45) Acton 1997: 573.
- 46) Ibidem: 574.
- 47) Ibidem: 383.
- 48) Petacco 2014: 130-159.
- 49) Campolieti 2009: 307-394.
- 50) Calà-Ulloa 1928.
- 51) 北原 2008: 410-412.; Izzo 2012.
- 52) Petacco 2014: 160-169.
- 53) Ibidem: 182-191.
- 54) ガロ 2001: 334-335.
- 55) Campolieti 2009: 469-476.
- 56) 1898 年のイタリアは悲劇的な状況にあった。クリスピ首相が主導するアフリカへの植民地政策のために軍事費がかさんで経済不況が悪化し、国家収支は大幅な赤字を記録した。そのため、生活必需品に広く税金が課された。「貧者への課税」といわれたそれは、塩、ワイン、小麦粉、パンなどが対象となった。
- 57) Izzo 2012: 75-111.
- 58) Ibidem: 137-167.
- 59) D'Annunzio 1957.
- 60) 「檻褌を着て飢えたイタリア人兵士の中に、彼女はナポリ人を探した。彼女はガエータの時のように、ボンボンと葉巻を彼らに与えた」 Petacco 2014: 255.

## 参考文献

## 文献略号

本論考では、注において、同じ著作が連続して単独で言及あるいは引用される場合には、*Ibidem* を使用することとする。

## 1. 和文献

北原敦 2008 『イタリア史』 東京：山川出版社。

マックス・ガロ（米川良夫、樋口裕一訳） 2001 『イタリアか、死か 英雄ガリバルディの生涯』 東京：中央公論新社〔Gallo, Max. 1982. *Garibaldi La force d'un destin*. Paris: Fayard〕。

## 2. 欧文献

AA.VV. 2008. *La storia proibita*. Napoli: Controcorrente.

Acton, Harold. 1997. *Gli ultimi Borboni di Napoli*. Firenze: Giunti Editore.

Belmonte, Guido. 2015. *Regno delle due Sicilie liberali, ecclesiastici, fuoriusciti, traditori*, Napoli: Controcorrente.

Calà-Ulloa, Pietro. 1928. *Un re in esilio*. Bari: Laterza.

Calà-Ulloa, Pietro. 1967. *Ferdinando II di Borbone*. Napoli: ESI.

Campolieti, Giuseppe. 2009. *Re Franceschiello*. Milano: Oscar Storia Mondadori.

Coniglio, Giuseppe. 1999. *I Borboni di Napoli*. Milano: Corbaccio.

D'Annunzio, Gabriele. 1957. *Tutte le poesie*. Milano: Newton Compton.

De Cesare, Raffaele. 1969. *La fine di un regno*. Milano: Longanesi.

De Lorenzo, Renata. 2013. *Borbonia Felix*. Roma: Salerno Editrice.

Galasso, Giuseppe. 2007. *Storia del Regno di Napoli* . vol. V. UTET.

Glejjeses, Vittorio. 1978. *La storia di Napoli*. Napoli: Società Editrice Napoletana.

Izzo, Fulvio. 2012. *Maria Sofia Regina dei briganti*. Napoli: Controcorrente.

Lamberto, Radogna. 1978. *Storia della Marina Militare delle Due Sicilie*. Milano: Mursia.

Montalto, Mario. 2007. *La Marina delle Due Sicilie*. Napoli: Editoriale il Giglio.

Perrone, Nico. 2009. *L'inventore del trasformismo*. Catanzaro: Rubbettino.

Petacco, Arrigo. 2014. *La regina del sud*. Milano: Oscar Mondadori.

Proust, Marcel. 2012. *A la recherche du temps perdu*. vol.v *La prigioniera*. Mondadori.

Tosti, Amedeo. 1947. *Maria Sofia, ultima regina di Napoli*. Milano: Garzanti .

